

言語・文学分野における「言語分野」について

1. 言語分野の定義

〔学問分野としての定義〕

言語分野は、人間固有の能力・活動である言語の諸側面を、客観的な証拠と実証的な手法に基づき、明らかにしようとする学問分野である。

「言語」は、それ自体が多義語である。その主な意味は、(1) 音声、身体動作、図像により、個人の間で知識を共有するための記号体系一般、(2) そのような記号体系を習得し使用する能力、(3) そのような能力を使って他の人間と知識を共有する活動、(4) 「ロシア語」、「アイヌ語」、「アラビア語」、「日本手話」などと呼ばれる個別の記号体系、(5) 個別の記号体系に従って産出された音声自体あるいはその記憶、および文字などにより記録された資料や作品、である。

〔言語分野に含まれる専攻等〕

言語分野は言語学に限定されるものではない。能力や活動としての言語を客観的に捉えることを基礎とする学問分野は、すべて言語分野に含まれる。専攻の名称等で用いられている分野名を挙げれば、言語情報学、外国語学、日本語学や英語学などの個別言語研究（〇語学）、言語コミュニケーション論、異文化コミュニケーション論、国際コミュニケーション論、情報メディア学、言語文化学、などの分野である。

2. 言語分野に固有の特性

〔固有の視点と関心〕

(1) 普遍性と個別性（多様性）へのバランスのとれた関心

個々の人間は能力としての言語を普遍的に持つ。一方で、その能力は、特定の言語体系（ひとつとは限らない）を獲得し、それを使用することにより実現される。個別の言語体系はそれぞれ独特の特徴を持っている。また、同じ言語を話すと言われている人々の言語体系が一致しているわけではなく、同一の人間の言語使用ですら著しい多様性を示す。このような状況において、観察される多様な現象に目を奪われ、それを成り立たせている普遍的な仕組みと能力の存在を忘れてはならない。しかし同時に、性急に普遍性を求めるあまり、多様な言語現象を正確に記述する努力を怠ることもあってはならない。研究者ごとに重点の置き方は異なるが、言語分野全体として見れば、普遍性と個別性の双方に十分な注意が払われている。

(2) 比較の視点

人類の進化に伴う言語能力の変化を除けば、人間は同じ普遍的言語能力を持つと考えられる。一方、個別の言語体系は多様であり、しかも時間の経過とともに変化することを免れない。しかし、個別の言語が示す多様性は、それらを互いに比較することで、個別性を超えた普遍的（一般的）特徴を知る手がかりを与えてくれる。比較は、時代の異なる言語の間でも、同じ時代の言語の間でもおこなうことができる。特に、比較によって言語の歴史的変化を推定する歴史比較言語学は、近代言語学に不可欠な多くの概念や方法を生み出し、その成立に大きく貢献した。比較は、普遍性と個別性を繋ぐ方法として、言語分野で常に重要な位置を占めている。

(3) 個別の言語体系に与えられる価値の相対化

個別言語の社会的評価はさまざまである。広い地域で使われ、それを話すことが威信を持つ言語もあれば、仲間うちのみで使われ、話すことを話者が他者に知られたくないと思う言語もある。その一方で、個人の中では母語に特別な価値が与えられる。このように、言語に対しては社会的偏見（ステレオタイプ）が必ず存在する。しかし、個別言語に付与される偏見とその言語体系の間には、何の必然的関係もない。言語が持つ偏見は、それ自体が考察の対象となるものであり、言語研究の前提を構成するものではないことは、言語分野における基本的な理解である。

(4) Folk linguistics の相対化

私たちは日常的に言語に係わる多くの問題に直面するが、同時にその多くを、特に言語の特質を意識せずに解決している。例えば、対話相手の言語体系と自分の言語体系の間に、違いがある場合は、ほとんど無意識のうちに、対話相手の言語体系に合わせるような調整がおこなわれる。また、相手が理解していないと思えば、同じ内容を別の言語形式を用いて表現することができる。新たに必要になったモノや概念には、すぐに新たな言語表現を作って対応するし、ある表現の使用頻度が増加すれば、より短い表現に置き換えることで、過剰な冗長性を避ける。異なる言語を話す人々の間でも、共有されるわずかの語彙さえあれば、伝達される内容は限定されるが、新たな言語体系を一時的に作り出すことさえできる。こうした無意識の対応や解決は、folk linguistics とでも呼ぶべき、言語に関する素朴な知識に支えられている。それは、言語表現とその指示対象とを同一視する一方で、言語表現を指示対象の名前と見なすような、矛盾した見方を含んでいるが、多くの場合有効に働く。問題はむしろ、人々が folk linguistics 以外の言語観を持たないことである。言語分野の学問はすべて、自明とされる言語のこのような捉え方を相対化し、それを批判的に理

解することの上に成り立っている。

(5) 研究方法における慎重さ

言語は言語を用いて説明することができる（再帰性）。しかし、これは方法論上の難問でもある。言語の考察を言語を使っておこなわざるを得ないため、研究対象を客観的に設定するのが容易でないからである。そこで、言語使用者としての直感や無意識が観察や分析の客観性を損なうことがないように、言語分野では多くの理論、概念、方法が考案されてきた。例えば、「(単)語」を必要に応じて「語彙素」、「語形」、「音韻的語」などと定義し直したり、異なる「意味」のレベルを明確に設定することなどである。しかしそれでもなお、言語分野の研究においては、言語を用いて言語を考察する危うさが常に意識されている。

(6) 学際的関心

言語は人間の基本的な能力・活動であるため、人間の他のさまざまな能力、活動、現象と密接に係わっている。例えば、能力としての言語は注意、記憶、推論など、他の認知能力と無関係ではあり得ない。また、活動としての言語は、共同体を成り立たせている社会的な活動の一環として位置づけられる。さらに、産出された言語（言語作品）の考察は、人文学の中核を成す分野である。一方、個別言語や、個別言語の一部（特定の文体など）を成人後に習得することへの大きな需要は常にあるが、言語の理解とともに効率的な教育方法の考案は、このような需要に応えるために不可欠であり、教育学との連携が必要とされる。以上述べたように、言語分野は、固有の理論と方法を持ちつつ、他の学問分野との交流をも極めて重要であると見なす学問分野である。

(7) 社会的貢献への指向

コミュニケーションは、社会の成立と維持に不可欠である。コミュニケーションは言語によりおこなわれるとは限らないが、言語がその中心的役割を担うことは明らかである。そのため、言語の特徴の解明がよりよいコミュニケーションに繋がっていくことは、当然期待される。それに応えるかたちで、言語分野の中でも外国語研究は、対象とする個別言語の研究と同時に、その言語の教育に深く関わってきたし、コミュニケーション論は、異言語間のコミュニケーションだけでなく、同一言語内でのコミュニケーションも含む広い範囲を対象としている。また、このように明示的に社会貢献を目指していない分野でも、言語研究は社会に貢献できるという考え方は、広く共有されている。

[多様なアプローチ]

言語の普遍的特徴の解明と個別的特徴の解明とは、いずれも言語を理解する上で不可欠であり、普遍的特徴の解明には個別的特徴の理解が、また、個別的特徴の解明には普遍的特徴の理解が前提となる。理論言語学は言語の普遍的特徴の解明に重点を置く。記述言語学は共同体レベルでの言語の個別的特徴に、社会言語学や方言学は個人レベルでの言語の個別的特徴に重点を置く。社会言語学はまた、個人または共同体が複数の言語を持つ場合も扱う。複数の言語の接触を扱うアプローチは接触言語学とも呼ばれる。

言語自体にもいくつかの異なるレベルが設定できる。大きく分けて、音声、単語、文、発話のレベルである。それぞれに対応して、音声を扱う音声学、音声の機能面を扱う音韻論、単語の構造を扱う形態論、文の構造を扱う統語論、コンテキストと発話の関係を扱う語用論、そしてすべてのレベルにおける語や文などの言語形式の意味を扱う意味論という分野がある。

比較の視点を取るのには、主に歴史比較言語学と言語類型論である。歴史比較言語学は、同系統の異なる言語を比較することにより、それらの言語が辿った変化を推定するが、変化を引き起こすメカニズムの解明も重要なテーマである。一方、言語類型論は、一見ランダムに見える言語の多様性の背後にある規則性を発見し、そのメカニズムを解明しようとする。いずれも、理論言語学と記述言語学の双方と密接な関係を持つ。

言語の普遍的特徴の解明を目ざすにしろ、個別的特徴の解明を目ざすにしろ、実証的な手順を踏むものであるかぎり、実際の言語の使用（運用）の考察なしに研究を進めることはできない。言語の使用をどのように位置づけるかという観点からは、その結果に注目するアプローチ（文献学、コーパス言語学）、言語使用のプロセスに注目するアプローチ（心理言語学）、言語使用を可能にする能力に注目するアプローチ（生成文法、認知言語学）をあげることができる。

世界には多くの言語が存在する。それぞれは話者の生活に欠かせない能力であると同時に、独自の特徴をもった知識体系である。従って、それぞれの言語の研究に固有なアプローチもあって然るべきである。これらは、国語学、日本語学、英語学、中国語学のように「〇〇語学」と呼ばれる。

人類は歴史の中で、移住、婚姻、交易、略奪、侵略、布教などを通じ、母語以外の言語を話す集団や個人と係ってきた。今後も母語以外の言語を習得する必要は、けっしてなくな

らないだろう。母語話者が持つ個別言語の能力を、それを母語としない人々に、辞書や文法書などの形態を使って、知識や規則として言語化するとともに、それらの知識や規則の効率的な習得の方法を考案するのが言語教育の分野である。また、個別言語の中には、地域の共通語として使われるものがあるが、その使用地域や使用場面を拡大するための政策（言語政策）が講じられることもある。言語政策は、言語分野以外で扱われることもあるが、言語分野においては、言語教育や社会言語学の中で扱われることが多い。

[言語分野の役割]

言語は人間の知的活動の基盤である。にもかかわらず、あるいはかえってそうであるからこそ、私たちは言語を自明の能力や現象と感じ、敢えてその姿を理解しようとはしない。言語に係わるさまざまな問題に直面しても、経験的な知識のお蔭で、ある程度解決できるからである。

実証性を欠く考察は無意識のうちにさまざまな偏見の影響を受ける。特に言語的多数派が持つ偏見は、ときに言語的少数派への差別を生み出すことがある。とは言え、言語に対する偏見の影響は避けることができない。規範的な言語体系を生み出したり、母語への帰属意識を形作るのも、偏見だからである。

言語分野の学問は、このような自明の存在である言語に敢て意識を向けさせ、その働きや仕組みを対象化することにより、人間の知性の特性を客観的に理解する手掛かりを与えることができる。

....

3. 言語（・文学）分野を学ぶすべての学生が身に付ける（ことを目指す）べき基本的な素養

....